竹内　直「日本和声論」に関する理論史の予備的研究」

報告者の令和 5 年度の研究課題は、主に 1930 年代から 40 年代にかけて活発に議論された「日本和声論」を音楽理論史的観点から考察するにあたっての予備的研究である。

これまでの「日本和声論」に関する先行研究では、音楽理論的な解明というよりは、「日本和声論」から生じた「日本的作曲」や「日本らしさ」の概念をめぐる考察に重きが置かれていた。報告者は先行研究に対する批判的な検討を行った上で、「日本和声論」を理論史の観点から考察するための予備的研究として、「日本和声論」が活発に発表、論じられた 1930 年代から 40 年代前半の各種理論（箕作秋吉、下総皖一、田中正平、坊田壽眞ほか）の精査を行った。また戦後に発表された理論（貴島清彦、松本民之助、小山清茂、中嶋恒雄）についても調査を進めた。

本研究課題では「日本和声論」を 1930 年代や 40 年代特有の文脈に限定して捉えるのではなく、音楽理論史的な観点を重視し、西洋音楽理論の受容や日本と西洋の理論上の相互作用という面から検討した。とりわけ「日本和声論」は、日本の音階論との接点を多く有しており、日本の音階論に関する理論史的な調査も並行して行った。本研究課題の一部は、「20 世紀日本における音楽理論」を扱った書籍に収録される予定である。

◆講義・講座等
＊大学院音楽研究科：日本伝統音楽研究 d Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、音楽学特殊研究 m Ⅱ・Ⅳ
＊音楽学部：音楽学特講 m
＊ 2023.4-2024.3　奈良教育大学非常勤講師（「音楽史Ⅰ（西洋音楽史）」「音楽理論」「音楽学概説」）
＊ 2023.4-2023.9　神戸芸術工科大学非常勤講師（「音楽の歴史と文化」）
＊ 2023.4-2024.3　同志社女子大学学芸学部嘱託講師（「音楽と諸芸術」、専攻科「楽書講読Ⅰ・Ⅱ」）
＊ 2023.4.2024.3　相愛大学音楽学部非常勤講師（「西洋音楽史（前期・後期）」「楽書講読ⅠA・B」、大学院「西洋音楽史特別演習 A」）
＊ 2023.4-2023.3　龍谷大学国際学部非常勤講師（「音楽芸術論 A」）
＊ 2024.3.23　京都市立芸術大学芸術資源研究センター「音と身体の記譜研究」プロジェクト主催「タブラチュアを考える～動作が導く音の世界」（企画・コーディネート）
◆資料調査
＊ 2023.8 国立国会図書館資料調査
◆その他
＊ 2023.4-2023.11　東洋音楽学会第 74 回大会実行委員
＊ 2023.5-2024.3　日本芸術文化振興会文化活動調査員
＊ 2023.11-2024.3　日本芸術文化振興会専門委員会委員

根本　千聡「院政期における打楽器演奏伝承の考察」

2022 年度に引き続き、雅楽の打楽器に関する研究をおこなった。2023 年度はこれまでの研究成果を総括するため、復元演奏をともなう公開講座を 1 月に開催した。公開講座の要旨は冊子媒体としてまとめてある。公開講座の際の演奏は後日、動画としてアップロードを予定している。また、昨年度に予告していた『明暹流鞨鼓譜』の翻刻・解題も研究紀要に掲載予定である。これら一連の研究により、これまで曖昧な扱いであった院政期雅楽の復元に際しての打楽器の奏法と演奏速度について、ある程度客観的な基準にもとづく見解を示せたのではないかと考えている。

上記のほか、復元作業を通じて得られた気づきをもとに、笛の古楽譜の解読について新たな知見を得るに至った。これは 2024 年度からの研究テーマとして調査を進める予定であり、その端緒として、2023 年度の東洋音楽学会大会において発表をおこなった。論の骨子は研究ノートとして次号『東洋音楽研究』に掲載が決まっている。

◆関連する執筆
＊ 2023.8　（書評）福島和夫・上野学園大学日本音楽史研究所編『歴史学としての日本音楽史研究』、『東洋音楽研究』88、64 ～ 68 頁
＊ 2024.1　（配布資料）「雅楽の復元研究―院政期における打楽器の奏法と演奏速度の考察―」

◆講義・講座
＊ 2023 年度　日本伝統音楽演習ｅⅠ～Ⅳ
＊ 2023.12.14　ゲストスピーカー　於：関西大学
＊ 2024.1.21　日本伝統音楽研究センター第 63 回公開講座「雅楽の復元研究―院政期における打楽器の奏法と演奏速度の考察―」
◆学会発表
＊ 2023.6.3　東洋音楽学会東日本支部第 134 回定例研究会「琵琶演奏伝承の研究―八世紀から十世紀前半にかけて」
＊ 2023.11.19　東洋音楽学会第 74 回大会「笛の古楽譜にみる「基本旋律」の意識」
◆専門：音楽学・日本音楽史学

光平　有希「旧帝国大学精神医学病室史料にみる近代日本音楽療法の実相」

報告者は近世・近代の日本音楽療法研究を進める中で、ここ数年はとりわけ日本国内外の旧帝国大学附属精神病院、あるいは大学附属病院内の精神医学講座に焦点を当て、横断的・統合的な比較検討に取り組んでいる。当時の音楽療法実践内容は、病院年報や音楽療法実践記録書に記載され、各大学の後身施設を中心に現存しているものの、これまでそれらの史料が研究の対象になることはなく、それゆえ近代日本精神医療における東西音楽療法の全体像が明らかにされることはなかった。2023 年度は大阪大学・九州大学・京都大学・東北大学・名古屋大学・北海道大学で収集した一次史料の翻刻、ならびに個別・横断分析、同時代の西洋音楽療法との比較分析に従事した。また、新聞記事・目録調査の結果、統治期の外地旧帝国大学（台北帝国大学・京城帝国大学）でも音楽療法実践がおこなわれていたことが明らかとなったことから、関連一次史料所蔵先の特定にも務めた。次年度以降はこれらの調査結果をもとに海外での史料調査・収集へと発展させていく。

報告者は京都癲狂院における音楽療法実践の様相を明らかにすべく、2020 年度より継続して明石博高関連史料を調査している。2023 年度はその調査結果を仮目録の形で公開した。並行して、研究分担者として参画している科学研究費助成事業「20 世紀日本の医療・社会・記録－医療アーカイブズから立ち上がる近代的患者像の探求（基盤 A）」および「日豪の薬物依存治療と薬物政策に関する比較研究（国際共同研究加速基金：海外連携研究）」では、他研究者との協働で史料の調査や分析にも取り組んだ。

◆関連する刊行物・口頭発表
＊松田清・光平有希「京都府立京都学・歴彩館所蔵　明石博臣氏寄贈明石博高関係資料仮目録」『近世京都学会』第 6 号、pp. 119-149.
＊光平有希「維新直後に主導された京都の近代化―明石博高と「お雇い外国人」」『幕末維新史への招待』山川出版社、pp. 198-200.
＊光平有希「音楽の「癒す力」とは？」『SIESTA』109 号、pp. 8-9.
＊光平有希「アートと医療 1「日本における音楽療法の歴史的展開 ―近代日本精神医療を中心に―」芸術計画論「アートX」（中ノ島芸術センター：文化庁講座）、大阪大学中之島芸術センター、2023.7.29。
◆講義
＊ 2023.4. ～ 2024.3. 日本伝統音楽演習ｆⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
◆科研費
＊ 2021.4. ～ 2025.3. 研究代表者、科学研究費（若手研究）、日本学術振興会、「旧帝国大学精神医療にみる近代日本音楽療法実践の諸相」
＊ 2021.4. ～ 2025.3. 研究分担者（研究代表者：鈴木晃仁）、科学研究費（基盤研究 A）、日本学術振興会、「20 世紀日本の医療・社会・記録－医療アーカイブズから立ち上がる近代的患者像の探求」
＊ 2023.9. ～ 2026.3. 研究分担者（研究代表者：橋本明）、科学研究費（国際共同研究加速基金：海外連携研究）、日本学術振興会、「日豪の薬物依存治療と薬物政策に関する比較研究」

上野　正章「1. 日本伝統音楽研究センターにおけるプロジェクト研究及び共同研究への参加」「2. 近代日本における古典音楽の独学についての比較研究――雅楽と謡曲を中心に民間雅楽の調査」

本年度は「様式分化をとげた雅楽を対象とする伝承実態調査」の一環で滋賀県湖北エリアを中心に調査した。儀礼演奏に立ち会い、録画・録音・写真撮影し、関係者への聴き取りを行った。詳細は分析を待つ必要があるが、演奏様式の偏差は比較的小さい。聴き取り調査から、昭和期以降の沿革が明らかになり、伝承における課題が浮き彫りになった。両地域とも伝承は困難な状況にあり、大音地区ではすでに雅楽は演奏されておらず、宇根地区では本年度「豊栄の舞」が中止された。

録音の書き起こし作業を行った。報告書作成に際して固有名詞や方言、聞き洩らしを確認するためだが、話し言葉を文字に起こしてみると、しばしば行間から担い手の祭事への想いが浮かび上がる。報告書への積極的な活用を検討した。

『謡鏡』の翻刻

「祝言の音・声・音楽―能楽とその周辺」の一環で『謡鏡』第２章「声（コヘ）之つかひやうの事」、第６章「乱曲（ランキヨク）之論（ロン）」を再度翻刻し、現代語訳を試み、解説を執筆した。

謡曲家の研究

本年度は近代の謡曲愛好家に焦点を当てて研究を進め、論文にまとめた。注目したのは「謡曲家」という言葉である。現行語彙に「謡曲家」という言葉はない。「謡曲」という言葉は頻見されるものの、接尾語の「家」をつけることはない。しかしながら、過去の謡曲文献を調べると――用例は少ないが――早くも近世に「謡曲家」という言葉を見出すことができ、明治期から大正期には積極的な使用が認められる。ただし、意味には揺らぎがあり、近世において「謡曲家」という言葉は卓越した謡い手を指したが、明治期から大正期にはもっぱら謡曲愛好家を指し示し、追って主体的な謡曲学習者という意味が加わる。近代に並行して生じた能楽改革――横道萬里雄の研究を借りるならば式楽からの脱却および家元制度の強化――に対比させるならば、近世のゆるく制度化された謡曲文化を母胎にして明治期の混乱期に出現したアマチュアによる主体的な謡曲実践が、家元を中心とする近代の能楽制度の再編に組み込まれ、師弟関係に回収されていく過程に重なり合うことが指摘される。

論文

「能楽の近代化の一側面 ――「謡曲家」という呼称の盛衰」『日本文学研究ジャーナル』第 28 号、青簡舎、2023 年、pp.96-118。

◆調査活動記録
05.05 下新川神社（守山市）。
05.20-21 錦織寺（野洲市）。
02.25 伊香具神社（長浜市）。
03.16 稲荷神社（野洲市）。
※全ての調査は田鍬准教授と共同で試みた。「様式分化をとげた雅楽を対象とする伝承実態調査共同研究」の報告も参照。

遠藤　美奈「鈴木大拙からポール・ケーラス宛英文書簡の調査研究」

本年度は、国外における英語の讃仏歌の萌芽に関わる重要な人物であるポール・ケーラス（Paul Carus 1852-1919）に関して研究を進めた。そのなかで、ケーラスが讃仏歌の創作に関与したことがわかる記録として、鈴木大拙（1870-1966）からケーラスへ宛てた手紙がある。このことから、鈴木大拙の書簡を所蔵する（公財）松ヶ岡文庫にて主な調査を行なった。

これらの書簡を通読した結果、大拙を通じてアメリカ本土での讃仏歌の受容の様子が伺えた。ケーラスは、1899年に讃仏歌集『Sacred Tunes For The Consecration Of Life: Hymns Of The Religion Of Science』を発表していたが、信徒らは、1894年に著した『The Gospel of Buddha（仏陀の福音）』を「聖書」のように好んで読んでいたようだ。大拙がケーラスへ宛てた手紙には、信徒らは『仏陀の福音』の一節が讃仏歌となることを強く希望している様子が書かれている。のちの1911年に刊行される『Buddhist Hymns －Versified Translations From The Dhammapada And Various Other Sources』にどの程度採用されたのかは、書籍と歌詞との比較検証を行なっているところである。

また、この調査を通じて、鈴木大拙がポール・ケーラスへ宛てた98通の英文書簡の翻刻と翻訳の機会をいただき、併せて鈴木大拙が代筆した釈宗演からポール・ケーラスへ宛てた英文書簡15通も同様に行なった。自筆譜の翻刻にはマット・ギラン（国際基督教大学）氏の協力を得て行なった。内容は、2024年7月に『鈴木大拙及び釈宗演からポール・ケーラス宛英文書簡』（松ヶ岡文庫叢書第八）として（公財）松ヶ岡文庫から刊行した。

なお、本研究は基盤研究（C）「越境する日本の仏教音楽　宗教・文化・精神のグローバル化」（研究代表GILLAN Matthew :19K00160）の研究分担によるものである。

◆関連する執筆

＊ 2023.12　曲目解説「メロディーの宝石箱《報恩講》」『めぐみ』264号、28-29頁。

＊ 2024.7　遠藤美奈　ギラン，マット編訳『鈴木大拙及び釈宗演からポール・ケーラス宛英文書簡』、（公財）松ヶ岡文庫。

大西　秀紀「近代日本音楽の音声資料に関する研究」

当該年度はまず科研費助成研究「内外・タイヘイレコードのディスコグラフィ作成」に関する研究業務を遂行した。また某所で歌舞伎に関する音源アーカイブの計画があり、その素材として大西所蔵のSPレコードを提供した。報告者は2007-8年に歌舞伎SPレコードの網羅的なディスコグラフィを『歌舞伎　研究と批評』（歌舞伎学会）に発表したが、今回のレコード提供に際し、新たにこれらをレーベル別のディスコグラフィに再編集し、加えて所蔵盤のデータを紐付けた。レコードのデジタル化作業は現在進行中で、近い将来Web上で公開される予定である。歌舞伎SPレコードは約600枚程度発売され（再発売を除く）、その一部はLPレコードやCDに復刻されているものの、まだ実際にSPレコードを収集し再生するしか聴くすべがないものが多いのも現状である。このアーカイブが公開されれば、歌舞伎SPレコードの約8割5分をWeb上で聴くことが可能になり、歌舞伎研究において音源資料を活用することのハードルが一気に下がることが期待される。

SPレコードが第一級の資料であることは言うまでもないが、日本においては音源資料に関する情報基盤が全く整っていない。どのような音源がいつ何枚発売されたのかといった基礎的情報が断片的にしか集積されておらず、現存しているかどうかを把握するだけでも多くの労力を必要とするのが実情である。当センターは田辺尚雄・秀雄コレクションを始めとする約4,000枚のSPレコードを所蔵しているが、他にも国内には50以上のSPレコード所有する機関が存在する。ただそれぞれは横の繋がりを持たないため、歴史的音源の研究を推進し文化的に利活用しながら継承していくためには、所蔵機関が一丸となった取組みが必要となる。この現状を鑑み、各所蔵機関同士の連携を図り、情報交換や各所蔵機関の所蔵リストおよび国内の発売目録等の情報を統合したデータベースの作成･公開を目指すため、2021年に「歴史的音源所蔵機関ネットワーク（通称・レキレコ）」が設立された。現在九州大学総合研究博物館、大阪芸術大学博物館、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターおよび数名の研究者が参加していて、報告者もその一員である。当該年度はサントリー文化財団の研究助成を得て、「「レコード学」の構築―研究基盤の形成と魅力発信をめざして―（代表：九大総合研究博物館・大久保真利子）」という表題で、レコードスリーブ（紙袋）の

意匠に関する調査研究を実施した。その成果報告のシンポジウムを 2024 年 6 月に開催の予定である（於：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターセミナールーム）。

◆関連した執筆
＊ 2023.12 「砂川捨丸の『不如帰』」『大阪府立上方演芸資料館 令和 3 年度年報』、大阪府立上方演芸資料館
＊ 2024.3 「大阪四花街のレコード」『「大大阪」が育んだ藝能』、清文堂出版
◆関連した講演・発表
＊ 2024.1 「国勢調査とレコード」『第 16 回定期講演会』、ボン大学片岡コレクション研究会（オンライン）
＊ 2024.2 「初代桂春団治のらくだ」、大阪府立上方演芸資料館（対面）

神津　武男「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの試用版作成公開と典拠資料の調査と研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、二件の研究費によって、次の二つの課題に取り組んだ。

第一に筆者が研究代表者として新たに、科学研究費補助金・基盤研究（C）、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベースの試用版作成公開と典拠資料の調査と研究」の採択を得て、本年 2023 年度を初年度として、2025 年度を最終年度とする。江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽」（義太夫節成立以後の人形芝居）の、真に科学的な通史の完成を目指して、資料整備を進めている。筆者は「浄瑠璃本」（通し本。演劇台本・脚本に相当）、「番付」（ポスター・チラシに相当）の二種の史料について、日本国内および海外で悉皆調査を展開してきた。近年新たに所在を把握した未調査機関を中心に実地踏査して、「浄瑠璃本」「番付」各データベースの充実と精度の向上を目指す。本年度は、次に掲げる機関について新規の資料調査を進めた。〈1〉浄瑠璃本（松阪市立旧長谷川治郎兵衛家・中野市立旧山田家資料館）、〈2〉浄瑠璃番付（名古屋市蓬左文庫・阪急文化財団池田文庫）。

第二に筆者が研究分担者として参画するところの、科研費・基盤研究（B）、研究課題名「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」（研究代表者は竹内有一氏）が 2020 年度に採択された。本年 2023 年度が最終年度である。「西村公一文庫」は、西村公一氏（大阪府豊中市）が収集した日本伝統音楽に関する新出コレクションである。事前の調査では同文庫は四千点を超えると見積もられ、京都・大阪を中心とする文化圏における日本伝統音楽の資料群としては、随一の点数を誇るコレクションである。当該研究課題は、その目録化を第一歩として同文庫を学界へ紹介し、同文庫の全貌を総合的に分析し、日本伝統音楽の資料学的研究に資することを目指す。筆者は浄瑠璃本の整理を担当し、通し本について詳細な書誌調査を行なった。西村氏の収集はいまも継続中で、2017 年度末の時点では 527 点と数えた（科学研究費補助金・研究活動スタート支援、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」16H07120 研究成果報告書）が、2023 年度までに寄託された分は、709 点と数えるに至った。

研究成果の社会還元のひとつとして【西村公一文庫紹介展】を前年度に引き続きオンラインと併催する形で開催した。2022 年 5 月早稲田大学演劇博物館の展示「近松半二　奇才の浄瑠璃作者」は、1998 年発表の拙稿「「近松半二」署名作品一覧」（岩波講座『歌舞伎・文楽』第九巻「黄金時代の浄瑠璃とその後」、岩波書店、一九九八年所収）で数えた 61 作品を襲用したものだが、筆者の最新の調査では浄瑠璃本 62 作品と数えている。そこで【西村公一文庫紹介展】のテーマを「近松半二の浄瑠璃本」とすることを提案し、日本伝統音楽研究センターの展示スペースで開催するに至った。62 作品を三期にわけて、2022 年 11 月―12 月に第一期、2023 年 1 月―3 月に第二期、本年度には 4 月―5 月に第三期を開催した。ひとりの作者の大半の作品を西村公一文庫本で辿ることが出来るという点に、西村文庫の充実ぶりを端的に理解いただけるものと考える。なお本号掲載の拙稿「〈西村公一文庫紹介展〉「近松半二の浄瑠璃本」全三期の補遺――早稲田大学演劇博物館展示図録『近松半二――奇才の浄瑠璃作者』の誤りを正す――」に、当該展示図録を再録しているので参照されたい。

浄瑠璃本や番付の所在調査の波及的な成果として、

「影印『伽羅先代萩』安永七年京都初演本――天明五年江戸初演同名本の原拠の紹介――」において、筆者所蔵の天下一本の孤本、安永七年京都初演本を写真として公開した。歌舞伎の初演の翌年、安永七年に京都で最初の人形浄瑠璃化が図られたとき、物語は「床下」で終わっていた。天明五年の江戸初演でも「床下」までの未完本で初板されたのは、原拠の京都本が「床下」で終わったため、と考えられる。近現代の人形浄瑠璃文楽はときどき「床下」を省略するが、「床下」こそ『伽羅先代萩』を象徴する場面であることを指摘しておきたい。

◆関連する執筆

＊（1）「江戸の浄瑠璃本板元・大坂屋秀八と外題目録『両竹鑑』について」（『歴史の里』第 27 号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2024 年 3 月所収）。

高橋　葉子「謡伝書用語の体系的研究―演奏の理念と表現を中心に」

1）表題の科研費研究の一部として、昨年度の東洋音楽学会において発表した内容をまとめ、「「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論―「呂の声」を中心に」」として本紀要第 20 号に発表した。これと連動して、同伝書の二種の伝本（法政大学能楽研究所般若窟文庫蔵本・東北大学附属図書館蔵本）の全文翻刻と校異、及び異本『謡曲拾穂鈔』との校異一覧を作成し、伝音アーカイブス「謡伝書の具体的理解と体系的把握に向けて」（責任者藤田隆則）の続編として公開した。翻刻には神戸女子大学長田あかね氏の協力を得た。

2）同じく「永正元年観世道見在判伝書」に対する研究として、同書収載の伝書「音曲十五之大事」の資料性について能楽学会において発表した。発表では喜阿弥の古作〈女郎花〉、及び金春系〈恋重荷〉の稀少記事を紹介し、金春系謡伝書としての同書の性格と資料的価値を明らかにした。さらに、従来「音曲十五之大事」が観世宗節自筆本の存在する「十五之次第」の再編書と見做されていることに対し、近年公開された資料「音曲十五之次第」（観世文庫蔵）を加えた詳しい本文比較を行い、従来説とは逆に「音曲十五之大事」が「十五之次第」に先行することを明らかにした。以上を通じ、室町末期における観世・金春両家の往来を背景とした伝書改編の一端を提示した。

3）昨年度に発表した闌曲に関する継続研究として、闌曲（乱曲）の代表的な曲種とされるクセについて、作詞・作曲・即興の観点から分析し、闌曲謡の創造性を論じた（『日本文学研究ジャーナル』）。クセに七五調の破律句が多いことはすでに周知されているが、例えば「東国下」のように破律句が極端に少ないクセについては、従来音楽的考察から外されてきたといってよい。論文では、こうした作詞的には平坦なクセが、実践的には闌曲謡による技法開拓の場として機能し、当時の法則外のふしが多く謡われたことを推測した。具体的には、「中音越（仮称）」「甲グリ」などの現行のふしが闌曲謡から発生したこと、「分離のトリ」の実施に自由度や即興性があったこと、さらに現在一般的な三地謡（一拍の音価を自由に変える謡い方）が闌曲謡から発生した可能性があること等を、複数の音曲伝書記事から明らかにした。

4）関連研究として神戸女子大学古典芸能研究センター謡伝書研究会（代表者樹下文隆）に参加し、室町末期の謡伝書『塵芥抄』と『混沌懐中抄』との条文比較を行い同センター紀要に発表した。『塵芥抄』の奥書には「混沌懐中抄に基づく」という一文があるが、実際の依拠の程度に対する検証は不十分で、一部には『塵芥抄』の殆どが『混沌懐中抄』に基づいているかのような漠然とした論調もあった。が、条文を詳しく検討した結果、分量・内容ともに依拠の度合いはさほど高くないと判断できることがわかった。分量的には、『塵芥抄』全 87 箇条のうち、『混沌懐中抄』（全 47 箇条）に基づくと思われる条文は 17 箇条である。『塵芥抄』全体の内容と意義については引き続きの研究課題としたい。

表題の科研費研究は 2023 年度で終了し、次年度から科研費研究「音曲伝書の体系的研究」として発展的に継続する。研究期間中に当初の目標である音曲伝書記事・用語の索引・註解作成を準備したい。

◆論文
＊ 2023.08「「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論―「呂の声」を中心に」日本伝統音楽研究センター紀要『日本伝統音楽研究』第 20 号
＊ 2023.12「節曲舞の作詞・作曲・即興の実際―創造の場としての「乱曲」へ」『日本文学研究ジャーナル』28 号、古典ライブラリー
◆資料翻刻校訂
＊ 2023.07「謡伝書の具体的理解と体系的把握に向けて―「永正元年観世道見在判伝書」の翻刻データ公開」 日本伝統音楽研究センター伝音アーカイブズ
◆研究ノート
＊ 2023.06「『塵芥抄』と『混沌懐中抄』の条目比較」謡伝書研究会研究報告、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第 17 号
◆口頭発表
＊ 2024.03「観世道見仮託「音曲十五之大事」の資料性―観世宗節筆「十五之次第」との比較を中心に」能楽学会第 22 回大会
◆助成事業に基づく研究
＊科学研究費助成事業基盤研究（C）20K00131 研究課題「謡伝書用語の体系的研究―演奏の理念と表現を中心に」（研究代表者）

多田　純一「近代日本における西洋音楽受容および国産自動ピアノに関する研究」

研究概要

本研究は科学研究費「ショパン作品の演奏におけるヴァリアントの選択と即興的表現の研究」（20K00244）に続き、新たに得た科学研究費「モダン楽器のピアノによるショパン作品の演奏表現とその変化」（23K00219）を基盤としつつ、近代日本における西洋音楽受容の考察、とりわけ大正期の国産自動ピアノを調査の対象としている。

主な研究成果として、澤田柳吉（1886-1936）の音楽活動および彼の人物像を明らかにした伝記『澤田柳吉 日本初のショパン弾き』（春秋社）を 2023 年 8 月に出版、9 月に彼が残した SP レコードの復刻版およびピアノ・ロールを録音した CD『澤田柳吉の芸術 ピアノ・ロール＆ SP レコード 日本録音集』（サクラフォン）を出版した。まず、澤田の音楽活動を網羅した人物伝の出版により、ピアニストという職業の成立過程および、明治後期から昭和初期における洋楽受容史の概要を示した。CD では大正期に製作された国産自動ピアノのためのピアノ・ロールについて、学習院アーカイブズ、中森隆利氏、佐々木幸弥氏から資料使用の協力を得て、ピアノ研究家である松原聡氏による再生により、新たにレコーディングした。日本楽器（ヤマハ）は昭和初期に自動ピアノおよびピアノ・ロール製作を終えたこと、資料の劣化により再生すること自体が難しいことなどから、これまで先行研究が見られなかった。しかしながら、再生可能なロールを録音したことにより、大正期にどのようなピアノ・ロールが製作され、そのロールがどのような音楽的内容であったのかの検討が可能となった。今後は、さらに多くのロールの調査を実施し、再生および音源化を目指したい。なお、CD では澤田柳吉が録音・出版した SP レコードを未発表の音源も含めて復刻した。

現地調査としては、10 月 5 日から 15 日にポーランド・ワルシャワにて開催された第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールの全日程を調査した。このコンクールの特徴は、ショパンの時代に使用された楽器によって、バッハ、モーツァルト、ショパンとほぼ同時代のポーランド人作曲家、そしてショパンの作品が演奏される点にある。出場者はピリオド楽器奏者だけではなく、ピリオド楽器とモダンのピアノを併用するピアニスト、モダンのピアノをメインとするピリオド楽器の演奏経験が少ないピアニスト、モダンのピアノをメインとしつつ複数年かけてこのピリオド楽器の取り扱いを学んだピアニストの 4 種類に分けられた。第 1 ステージおよび第 2 ステージでは独奏の作品が課題曲であったが、ショパンの時代に行われていた即興的な前奏の付加、再現部における装飾音の付加、ヴァリアントの選択が数多く行われた。このコンクールにおける演奏表現が、来年 2025 年に開催される第 19 回ショパン国際ピアノ・コンクールの演奏にどのような与える影響を与えるのかを考察する。

◆著書出版
＊ 2023.08 単著『澤田柳吉 日本初の「ショパン弾き」』、春秋社
◆音源出版
＊ 2023.09 CD『澤田柳吉の芸術 ピアノ・ロール＆ SP レコード 日本録音集』、サクラフォン
◆著作活動
＊ 2023.08 共著論文「第 1 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールおよび第 18 回ショパン国際ピアノ・コンクール

におけるエディションの選択」『つくば国際短期大学紀要』第 49 輯、pp.49 ～ 58（2023 年 8 月 10 日）（科学研究費「モダン楽器のピアノによるショパン作品の演奏表現とその変化」の研究協力者である岡部玲子、武田幸子との共著）
＊ 2023.07 単著雑誌記事「ヴィルトゥオーゾが活躍した時代に出版された『ハノン』」『ムジカノーヴァ』2023 年 7 月号、音楽之友社、p. 16（2023 年 7 月 1 日）
＊ 2023.08 雑誌取材記事「質疑応答とインタビュー」（第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクール記者会見 & インタビュー）『ショパン』8 月号、ハンナ、pp.48 ～ 49（2023 年 8 月 1 日）
＊ 2023.09 雑誌取材記事「第 5 回フォルテピアノ・アカデミー SACLA 受講体験記」『ムジカノーヴァ』2023 年 9 月号、音楽之友社、pp. 33 ～ 35（2023 年 9 月 1 日）
＊ 2023.10 ウェブマガジン取材記事「「ショパンと彼のヨーロッパ」国際音楽祭 'NOT FOR THE FIRST TIME!'」『ぶらあぼ ONLINE』（2023 年 9 月 20 日）
https://ebravo.jp/archives/149063 （2024 年 4 月 20 日検索）
＊ 2023.10 雑誌取材記事「第 19 回「ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭」現地レポート」『ムジカノーヴァ』2023 年 10 月号、音楽之友社、pp. 34 ～ 37（2023 年 10 月 1 日）
＊ 2023.11 雑誌取材記事「今年も熱狂のワルシャワ「ショパンと彼のヨーロッパ」国際　音楽祭」『ショパン』11 月号、ハンナ、pp.44 ～ 45（2023 年 11 月 1 日）
＊ 2023.12 雑誌取材記事「よみがえるリアルショパン第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクール」、「第 2 ステージ―オール・ショパン・プログラム」、「ファイナルステージ―勝ち残った 6 名のファイナリスト」『ショパン』12 月号、ハンナ、pp.4, 16 ～ 19（2023 年 12 月 1 日）
＊ 2024.01 雑誌取材記事「川口成彦がショパン全曲演奏会始動」『モーストリー・クラシック』3 月号、神戸クルーザー、p.67（2024 年 1 月 19 日）
＊ 2024.04 書評「100 年前のベートーヴェン像――まずは人物重視や活字情報から、そして音楽へ」（沼口隆、安川智子、齋藤桂、白井史人（編著））『ベートーヴェンと大衆文化――受容のプリズム』）『週刊読書人』第 3534 号、6 面（2024 年 4 月 5 日）
◆口述活動
＊ 2023.06 15　ラジオ成田「ピースリー・ミュージック」No.114、ゲスト出演（パーソナリティ：まつのじん、植草ひろみ）、楽曲とトークの記録『ピースリー・ノート』5、pp.37 ～ 40 に収録（2023 年 10 月 7 日）
＊ 2023.10 22　講演「澤田柳吉（1886-1936）－日本初のショパン弾き－」Salon de YURI Vol.6、ピアノサロン Salon de YURI
＊ 2024.01 20　講演「富士レコード社　第 44 回 SP レコードコンサート　日本人初の「ショパン弾き」澤田柳吉の芸術」（案内人：多田純一、夏目久生、特別ゲスト：小山内洋、松原聡）ブックハウスギャラリー
＊ 2024.02 15　ラジオ成田、「ピースリー・ミュージック」No.150、「第 150 回記念対談「ショパンとピリオド楽器」永野光太郎氏と共にゲスト出演（パーソナリティ：まつのじん、植草ひろみ）、楽曲とトークの記録『ピースリー・ノート』6、pp.68 ～ 71 に収録（2024 年 4 月 6 日）
＊ 2024.02 22　ラジオ成田「ピースリー・ミュージック」No.151、「第 150 回記念対談「ショパンとピリオド楽器」永野光太郎氏と共にゲスト出演（パーソナリティ：まつのじん、植草ひろみ）、楽曲とトークの記録『ピースリー・ノート』6、pp.72 ～ 75（2024 年 4 月 6 日）に収録
◆学会活動
＊ 2023.06 17　日本音楽表現学会 第 21 回大会（京都女子大学）分科会司会
＊ 2023.11 04　日本音楽学会 第 74 回全国大会（聖徳大学）分科会司会
＊ 2024.02 11　研究報告「「ショパン弾き」澤田柳吉にとってのベートーヴェン」第 3 回ベートーヴェン学術実践研究会（BAPS）例会、シェ・クロード森下
◆調査・取材活動
＊近代日本における西洋音楽受容および国産自動ピアノに関する研究
＊第 19 回ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭現地調査（2023 年 8 月 18 日から 9 月 1 日、ポーランド・ワルシャワ）
＊第 2 回ショパン国際ピリオド楽器コンクール現地調査（2023 年 10 月 5 日から 15 日、ポーランド・ワルシャワ）

＊所属学会　日本音楽学会、日本音楽表現学会、日本音楽教育学会、音楽教育史学会

出口　実紀「白鳥拝殿踊に関する調査報告」

今年度は、岐阜県郡上市の『白鳥の拝殿踊調査報告書』が刊行され、拝殿踊で伝承されている踊り曲について執筆を担当した。白鳥拝殿踊は、伴奏楽器を用いず下駄の音（リズム）のみで踊られるもので、音頭取りによる即興や歌を掛け合う形式が見られるなど、音楽的特徴が随所にみられる芸能である。なかでも《場所踊り》と呼ばれる踊り歌は、地元（在所）と他村（他所）の人による掛け合いで構成される。歌の始まりは地元の人が音頭を取るが、途中で他村の人に音頭を渡すやり取りが歌われ、最後は再び地元の人に音頭が戻り終わり歌を歌う。これらは「在所渡し」や「場所名乗り」と呼ばれ、歌でやりとりをすることから「歌盃」とも称する。白鳥町ではしばらく伝承が途絶えていたが、残された音源や資料をもとに復活した経緯があり、今回の調査で新たに昭和 40 年代の《場所踊り》と現行の《場所踊り》では音階やテンポ、伴奏楽器など異なる点が多く見られることを報告した。

その他、共同研究の活動として和歌山県有田市得生寺で伝承されている雅楽の現地調査を実施した。この

地域では、特定の地区の人々によって代々雅楽が伝承されており、現在も数名の講員によって年に一度の来迎会式にて演奏が行われる。講員への聞き取り調査により、その伝承形態や独自の演奏伝承について情報収集でき、民間雅楽の伝承を紐解く一端になればと考えている。

採択中の科学研究費補助金･基盤研究（C）「龍笛要録譜の研究」は、今年度は中断期間で 2024 年度より再開する。今後の研究計画では、楽家の楽人が書写に携わった伝本内容の精査と並行して、中断のため実施できていなかった大神家の『懐中譜』、『基政笛譜』等の笛譜の複写調査および伝本内容の分析を中心に進める予定である。

◆関連する執筆
＊『白鳥の拝殿踊調査報告書』（執筆担当：「第 8 章 拝殿踊の音楽」）
◆関連する研究助成
＊日本学術振興会科学研究費助成事業　基盤研究（C）「『龍笛要録譜』の研究」（研究代表者､2021 年 4 月～ 2026 年 3 月予定）

丹羽　幸江「室町期の謡の旋律法の研究と能の復曲活動」

1､「金春禅竹の自筆譜にみる語り物音楽としての記譜体系」の研究

2023 年度より開始した研究課題「金春禅竹の自筆譜にみる語り物音楽としての記譜体系」（科学研究費基盤 C、2023 ～ 2025 年度）の初年度となった。本研究では能の楽譜として初めての本格的な記譜法を備えた謡本を記した金春禅竹の自筆譜に着目し、その記譜法の基本的な方向性のあり方を中心とした記譜法体系を明らかにする。そして音高を最優先に表示する歌い物音楽などの楽譜とは異なった、語り物音楽の楽譜の独自性を明確にしたいと考える。

本研究の仮説では、能の楽譜が音高面で精密さを追求してこなかった理由として、リズム面の八拍子だけでなく音高面でも同様の暗黙の前提があり、それは中世芸能に共通する「初重・二重・三重」という完全 4 度の音程の枠組みを骨格とする 3 つの音域「重」の存在があったためと予測する。2023 年度にはまず､禅竹よりも時代が下る室町末期の金春流謡本を取りあげ､検証を行った。『下間少進手沢車屋謡本』では、初重と二重とに対応する 2 種類の五声が記されていることを指摘した（→研究発表「室町末期『下間少進手沢車屋謡本』における一ツヨ吟とヨワ吟の原型」）。また、金春禅竹の胡麻の基本的機能として、講式と同様の五声との対応関係があり、音域の変化によって五声と胡麻の向きの対応を切り替えていた可能性があると論じた。（→論文「金春禅竹自筆譜における胡麻の音高機能」）

2、能の復曲活動

現在演じられなくなった能を復活する観世流梅若研能会の能楽師加藤眞悟氏の試みに参加している。2023 年 12 月には名古屋能楽堂にて《熱田龍神》の素謡による部分的試演が行われた。音楽面担当としてクリ・サシ・クセ部分の胡麻の解読を行った。

《熱田龍神》の伝本は少ないだけでなく、観世流の伝本の節付けが完備していなかったため、復曲作業では伊達文庫書蔵の下掛の節付けを観世流の記譜法へと翻訳しなくてはならなかった。このため上記の金春禅竹の自筆譜などの研究において金春流謡本を研究した成果を応用し、胡麻の流派間の読み替え作業を行った。

◆関連する執筆
＊ 2024.3　論文　丹羽幸江「金春禅竹自筆譜における胡麻の音高機能」 昭和音楽大学研究紀要、第 43 号。
◆関連する口頭発表
＊ 2023.11　研究発表「室町末期『下間少進手沢車屋謡本』における一ツヨ吟とヨワ吟の原型」東洋音楽学会第 74 回大会、於京都教育大学。

平間　充子「日本古代の儀礼音楽に関する研究：船楽を中心に」

当初の予定を変更し、儀礼における奏楽の一形態としての船楽について、先行研究を参照しつつ、平安時代の絵画資料と文献資料から数例を取り上げて検証した。「駒競行幸絵巻」（13 世紀末～ 14 世紀初め成

立）に見えるそれはよく知られているが、現行の雅楽にも用いられる左右の楽の概念、つまり左の位置 - 赤系統の装束 - 竜の意匠（唐楽）に対する、右の位置 - 青系統の装束 - 鳳凰・すなわち鳥の意匠（高麗楽）、に通じており、興味深い。両方の船に楽人を乗せる「駒競行幸絵巻」に対し、「年中行事絵巻」（12 世紀後半成立）には、舞人を運ぶのみで音楽を発しない竜頭船が描かれている。この編成は東三条院で行われた藤原頼長の大臣大饗に関する『台記』仁平 2 年（1152）正月 26 日条の記載と一致しており、同書同日条からは、衛府官人を兼職する所謂楽所の楽人が、雅楽寮の官人に率いられることによって雅楽寮としての奏楽を担う実態も窺われ、雅楽寮・近衛府・楽所といった組織が実際の奏楽場面においてどのように機能していたのかを端的に示す好例と言えるだろう。遡って長和 2 年（1013）9 月 16 日、藤原道長が土御門第で催した競馬行幸では、儀礼中と儀礼後の「上達部の御遊び」でも船楽が用いられた。後者では殿上と同じ音楽を船上でも演奏しながら寝殿前庭に漕ぎ着け、最後には上陸して庭に座す楽人と殿上人達との合奏に至る。距離を隔てて響きわたる音楽が徐々に近づきやがて一つになる、空間と時間とを絶妙に用いた演出は船楽ならでは、その場の一体感をより際立たせたと推察される。公的な儀礼中の音楽が、身分の差を超えた交歓を演出すべくその後の私的な宴でも効果的に用いられたことが窺われ、今後は他の事例を網羅して検証を深めると同時に、儀礼そのものが私的な要素を含む算賀や朝覲行幸についても考察を進めたい。

また、昨年度発行の著書の内容から、古代日本の朝廷で活躍していた 3 つの奏楽機関、すなわち大宝令に規定された雅楽寮、令外官の武官を統率する左右近衛府、中国に倣い設立された女性のみの奏楽機関である内教坊についての比較を概観し、加えて内教坊のレパートリー《玉樹後庭花》と女性演奏家の日中比較についても口頭発表を行った。

◆関連する口頭発表

＊ 2023.8 “Lord-vassal relationship revision reflected in respective court performance groups: A comparative study of ancient Japan and China”, 17th International Conference of the European Association for Japanese Studies（EAJS）, ゲント、ベルギー

＊ 2023.8 「内教坊の活動と宮廷女性の地位に関する日中比較：9 ～ 10 世紀の日本を中心に」、東アジア比較文化国際会議韓国大会、ソウルおよび Zoom

＊ 2023.10 「船楽と竜頭鷁首について」、藝能史研究會 2023 年 10 月例会、Zoom

◆関連する執筆

＊ 2024.1 「竜頭鷁首と船楽の遊び」『日本歴史』908 号、pp.24-29

◆関連する研究助成

＊日本学術振興会科学研究費助成事業　基盤研究 C「日本古代の音楽・芸能を社会的脈絡から探る：日中比較と儀礼研究の視点から」（研究代表者、2022 年 4 月～ 2025 年 3 月予定）

福本　康之「聲明および賛美歌との関係から見る近現代日本仏教界の洋楽受容の実態」

【2023 年度進捗】

筆者の研究は、仏教界における洋楽受容の実態についてのものである。そのなかで一昨年からは、それまでの洋楽をベースとした仏教界の音楽そのもののについての体系的な研究を踏まえ、関連領域である聲明（音楽的異文化）や賛美歌（宗教的異文化）といった、異なるジャンルの宗教音楽との関係から、仏教洋楽の受容について読み解くことを目的としている。

3 年目に当たる本年も、過去の 2 カ年に続き、洋楽の受容が盛んである浄土系教団（浄土宗および真宗十派）の声明側の資料（声明集およびなどの宗教専門誌）の調査・収集を継続的に行った。過去 2 カ年の調査から、1）仏教界で洋楽受容がはじまった近代以降に、伝統的な聲明についても比較的大きな改譜および新譜の創作が行われてきたことが明らかとなったことと、2）それを踏まえて、浄土真宗の声明において核となる（日常の勤行や法要での依用頻度が高い）もののひとつである「正信念仏偈」（親鸞著『顕浄土真実教行証文類』行巻末の偈文）を中心に、明治以降の改譜状況について調査した。本年度は、昨年度調査を行った浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、真宗興正派、真宗誠照寺派以外の浄土真宗系宗派（真宗高田派、真宗佛光寺派、真宗木辺派、真宗出雲路派、真宗三門徒派、真宗山元派）および東本願寺派（真宗大谷派から分離独立）を対象として調査・収集を行った。

結果としては、東西本願寺に比べ、他の宗派の組織が小規模なこともあり、資料を中心に歴史的な変遷をたどることは容易でないことが明らかとなった。その点については、各宗派の担当部署だけではなく、いわゆる声明担当の僧侶（及びその家系）の系譜を辿るなどの必要性（および可能性）が明らかとなったので、その点も並行して予備調査に着手した（具体的な調査は次年度に行う予定）。また、俗に「地方節」と呼ばれる（それらは特に葬儀などの場面で地方ごとに見られるもので、声明本に掲載の譜との関連性が伺える）唱え方の存在も、新たに判明した。その一方で、すでに浄土真宗本願寺派と真宗大谷派（いわゆる東西本願寺）で見られた「洋楽によるあるいは洋楽を念頭においたと考えられる正信念仏偈の譜」は、他の真宗系宗派では、確認に至らなかった。

以上、今年度のこうした調査からは、上意下達（中央組織からの発信）的な宗派という組織的統一態ではなく、声明家や地域性というものの力学が、声明という音楽のありように、作用しているのではないかと推察できる。

◆映像制作（企画・監修）
＊「節談『大和の清九郎』（実演廣陵兼純）」（YouTube 本願寺公式チャンネル「仏教と伝統芸能シリーズ」6-1）
＊「廣陵兼純氏に聞く節談（説教）の歩み」（YouTube 本願寺公式チャンネル「仏教と伝統芸能シリーズ」6-2）
◆演奏会制作（企画協力）
＊親鸞聖人御誕生 800 年・立教開宗 750 年慶讃法要記念「仏さまを讃える大合唱　本願寺音御堂 2023」（2023 年 11 月 23 日）
◆仏教讃歌編曲
＊弦楽五部版《みんな花になれ》
＊室内アンサンブル伴奏版《しんらんさま》
＊同組曲《浄土讃》
◆その他
＊浄土真宗本願寺派「仏教讃歌合唱講習会」講師
＊浄土真宗本願寺派仏教師教修「仏教音楽」講師